

# 人生を変える本との出会い

学部長 小 柳 治 宣(教授 社会保障論)

長い人生の中で人との出会いや付き合いが大切なように、どんな本にいつ巡り会うかということも、とても重要である。だが、本と出会うためには、本のある場所へ自ら出向く必要がある。その意味では経済学部は絶好の場所にある。経済学部の図書館は言うに及ばず法学部の図書館もすぐ近くにあるし、日本一の古書店街もある。これほど本と出会えるチャンスに恵まれた環境は滅多にあるものではない。

私も経済学部の学生だった頃は、授業の合間に、あるいはその日の授業が終わったあとに、よく図書館や本屋に足を運んだ。その頃とくに興味をもって読んだのは、自伝や評伝だった。そこでは、様々な時代の様々な職業の人たちに出会うことができる。出会うだけではなく、その人の人生を自ら体感することもできるのだ。すると、それまでのものの見方や価値観に微妙な変化が起こる。今まで見ていた世界とは違う世界が自分の前に開けてくるような気になることさえある。たとえば、杉田玄白の『蘭学事始』(岩波文庫)には、江戸時代の蘭方医たちがオランダ語の解剖書を苦心<sup>きんく</sup>惨<sup>たん</sup>憊<sup>ひ</sup>の末に翻訳する姿が描かれている。辞書のない時代だから、たった一語のオランダ語の意味を解き明かすのに、半日も時間を費やす。だが、それが解明したときの充実感、何にも代え難いものがあるはずだ。

この本を大学一年生の秋に読んでから私は、第二外国語のドイツ語を勉強することが苦にならなくなった。逆に楽しくすらなった。その後、私は、大学院の受験もドイツ語で受け、ドイツの社会保障制度を研究対象とするようになるのだ。そう考えると、あの時ドイツ語を読むことに情熱を注ぎきっかけを与えてくれた『蘭学事始』は、まさに私の人生を変えた一冊といえるのである。福沢諭吉の『福翁自伝』(岩波文庫)も、学問をすることの純粋な楽しさを教えてくれたという点では私の人生に少なからぬ影響を及ぼしている。

もう一つ、これは本ではないが、私の生き方に大きな影響を与えてくれたものがある。一枚の手書きの原稿だ。短いものなので全文を紹介しよう。

〈今年の私の誓いは二つあります。一つは100と80メートル障害の世界記録への挑戦。もう一つは秋の東京大会での金メダルです。記録更新はなんども機会がありますが、金メダルの機会は唯一度だけです。世界記録保持者が、よくオリンピックで惨敗するのは、心の勝負に負けるためだと思います。

大会までに、明治神宮と成田山に三度お参りして、お守りを心のささえに五輪のスタートラインに立つつもりであります。〉

これを書いたのは、依田<sup>よだいくこ</sup>郁子。東京オリンピックが開催された1964年のことだ。この原稿をあるデパートの古書展で見つけたのは、大学三年の時だった。東京オリンピック当時七歳だった私は依田郁子の名前は知らなかった。だが、「金メダル」と「世界記録」という大胆な言葉が私をとらえて離さなくなり、200字詰原稿用紙一枚の原稿を安くはない値段(確か4,000円だった)で買ったのである。陸上の短距離種目で日本人(男女含めて)がオリンピックのメダルを狙うなど今でもあり得ない話である。

そこで私は図書館で過去の新聞の縮刷版やオリンピック関係の書籍をもとに調べてみた。依田郁子

は、オリンピックで日本人女性として初めて陸上短距離（80メートルハードル）の決勝に進出し、五位入賞を果たしていたのだ。おそらくマラソンで金メダルを取るのに匹敵する快挙だったはずだ。さらに調べてみると、日本女性初のメダリスト人見絹枝や依田の恩師で、日本人で唯一人オリンピックの100メートルに入賞を果たした「暁の超特急」吉岡隆徳にも本を通じて出会うことができた。今は忘れられてしまっている、こういう人たちとの出会いは、困難に直面したときの私に大きな活力を与えてくれている。皆さんにも是非、本の町神保町でそうした出合いを体験して欲しいと思います。